

1 平成20年度千臨技血液検査精度管理

2 (2) 末梢血液像について

3  
4 ○吉田隆（株式会社サンリツ） 大山正之（千葉大学  
5 病院） 綿引一成（千葉県がんセンター） 柿沼豊（千  
6 葉市立青葉病院） 佐藤正一（千葉県循環器病センタ  
7 ー） 麻生裕康（千葉県がんセンター） 古賀智彦（千  
8 葉社会保険病院） 澤田朝寛（順天堂大学浦安病院）

9  
10 【目的】平成20年度千臨技血液検査精度管理、末梢  
11 血液像検査の結果を集計し、解析したので報告する。

12 【症例1】精巣原発の非ホジキンリンパ腫で中枢神  
13 経から左腎へ再発、化学療法後にG-CSFを投与した  
14 患者の末梢血液像である。この末梢血液像からだけ  
15 では、原疾患が窺がわれる症例ではないが、様々な  
16 腫瘍性疾患に対する化学療法後に遭遇する可能性の  
17 ある血液像である。M. BLASTまたはOTHERとして、  
18 異常細胞をとらえた施設は全参加施設62施設中60  
19 施設であった。また、所見においてMDSを疑うとし  
20 た施設が30施設と多く、次いで中毒性顆粒を指摘し  
21 た施設が17施設、化学療法後または化学療法中を指  
22 摘した施設が3施設であった。

23 【症例2】AML(M2)あるいは、AML/TLDの症例であ  
24 る。標本には高頻度に芽球が出現しており、M. BLAST  
25 またはOTHERとして、異常細胞をとらえた施設は全  
26 参加施設62施設中60施設であった。しかし、  
27 Aty-LympやLympとして報告した施設もあった。ま  
28 た、高頻度の芽球細胞の出現であるにも関わらず、  
29 低い出現頻度にてカウントした施設も認められた。  
30 所見においてはアウエル小体を指摘した施設が31  
31 施設、POD染色陽性を指摘した施設が15施設であっ  
32 た。また、AMLあるいは、FAB分類のM1、M2を指摘  
33 した施設が52施設であった。

34 【まとめ】異常細胞出現の指摘は、臨床への情報提  
35 供において、常に重要な役割を持つ。今回のサーベ  
36 イにおいて、多くの施設が異常細胞を指摘できたが、  
37 今後においても、その能力を維持されることを望む。

38 047-487-2631